

富山大学人文学部令和三年度卒業論文

『高等教育機関における障害学生の支援 ～学生ピア・サポーターに焦点を当てて～』

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11810089
氏名 多田直人

目次

第一章	問題意識	1
第二章	ピア・サポートに関する用語・先行研究	2
第一節	ピア・サポート	2
第二節	同世代によるピア・サポートの一例	2
第三節	ピア・サポーターの成長	2
第三章	調査概要	4
第四章	富山大学の事例	6
第一節	富山大学の障害学生支援について	6
第一項	支援室と支援部門	6
第二項	チャレンジカレッジ	6
第三項	ノートテイク	7
第四項	移動介助(移動支援)	8
第五項	ALP(アクセシビリティリーダー育成プログラム)	8
第二節	富山大学での支援について	9
第三節	学生ピア・サポーター関連	9
第五章	分析	10
第一節	動機・きっかけの違い	10
第二節	障害者のために参加した人達	10
第一項	障害に対するイメージ	11
第二項	学生ピア・サポーターの意義	13
第三項	支援を通して感じた事	16
第三節	自身のために参加した人達	20
第一項	障害に対するイメージ	20
第二項	学生ピア・サポーターの意義	21
第三項	支援を通して感じた事	23
第六章	考察	26
第一節	学生ピア・サポーターが障害学生支援に関わるメリット	26
第二節	学生ピア・サポーターへの影響	26
【参考文献】		30
【Web サイト】		30
注釈		31

第一章 問題意識

今や障害を持っていても高等教育機関(大学)に通う学生はいる。しかし、大学生活を送る上で、今までとは違う環境に慣れずに苦労している学生が少なからずいると考える。そんな中で障害学生の支援は重要な意味を持つと考える。

独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)が公開した「令和元年度(2019年度)障害のある学生の修学支援に関する実態調査」によると、「大学、短期大学及び高等専門学校」の障害学生数は37,647人で前年度より3,835人増加、学校種別では「大学は33,683人(前年度より3,493人増加)」、「短期大学は1,845人(前年度より75人の減)」、「高等専門学校は2,119人(前年度より417人の増)」となる。

障害学生が在籍している学校は937校で、全校の79.8%を占めていた。在籍数は「21人以上が427校(36.4%)」、「11～20人が134校(11.4%)」という推移になっている。

障害学生の相談窓口数について、窓口があるのは900校で76.7%と推移している。

支援障害学生数(障害学生のうち、支援を受けている学生のこと)の総数は18,702人で、前年度より1,611人増加しているが、未だに支援を受けられていない障害学生がいるのは明白だ。その背景には障害学生のコミュニケーション能力等の自身の問題だけでなく、支援する側にも問題があると考えられる。

その大学といった高等教育機関において障害学生窓口の中の1つの仕組みとして学生ピア・サポーターがいる。JASSOが公開した同調査によると、障害学生を支援する学生が在籍している高等教育機関において『学校が運営する組織に登録する支援学生がいる』学校数は235校であり、全体の約20%しかなく、今ひとつそのような障害学生を支援する学生(以下：学生ピア・サポーターと呼ぶ)が在籍している高等教育機関は少ない現状である。

それらを総合して研究する際、障害窓口や障害学生支援についての研究はあっても、学生ピア・サポーターに焦点をあてた研究は、数は前者よりは少なく、今ひとつ理解が及んでいないと考える。

そのため今回は高等教育機関における障害学生の支援について、始めに富山大学の障害学生窓口について説明した後、学生ピア・サポーターに焦点をあてて彼らの役割(位置づけ等)やそれぞれの活動内容、またピア・サポートを行うことで学生ピア・サポーターにとってどのような影響をもたらすのか、検証していく。

第二章 ピア・サポートに関する用語・先行研究

第一節 ピア・サポート

西山・山本(2002)によると『ピア』とは、(年齢・地位・能力などが)同等の者；仲間・同輩と訳され、ラテン語で「等しい、似た」の意味に由来する。

また『サポート』は文字通りサポートする、支援する、援助するという意味で、『ピア・サポート』は、“仲間による対人関係を利用した支援活動の総称”とされる。

2001 年に行われた国立教育研究所による「生徒指導国際フォーラム」で示された見解は、『ピア・サポート』を仲間支援の包括的用語として、その他の用語(ピアカウンセリング、ピアチューターなど)は下位分類にすることになった。

ピア・サポートの対象は広義に渡り、①障害者の自立支援、②HIV 感染者の支援、③癌患者の支援、④高齢者の支援、⑤自殺企図者への支援、⑥学習支援(大学や中等教育において)等、上記の例だけでも幅広い事象が対象であるが、今回は“障害を持つ学生を学生同士が”サポートするという意味合いで語られていく。

第二節 同世代によるピア・サポートの一例

第一節で『ピア・サポート』は仲間支援の包括的用語として分類されると記したが、その仲間支援を活用したプログラムが用いられた。西山・山本(2002)によると 1904 年にアメリカのニューヨークで非行少年に対して同世代の青年が友だちとして支援し、更正を支えながら自らも成長していくボランティア活動がある。そしてこのプログラムは後に日本にも紹介されて 1947 年には非行少年のメンタルフレンドのプログラムとして定着した。そうした福祉領域の状況を背景に、ピア・サポートが仲間支援のプログラムとして教育分野で 1965 年に実践されるようになっていった。

上記のように同世代によるピア・サポートという観点でみると、当時と内容は異なるものの、同世代によるピア・サポートはあった。但し、その論文内で記されているピア・サポーターへの効果は当時の状況におけるものであって、今回筆者が論じる内容とは異なるため、本論文では記さない。

第三節 ピア・サポーターの成長

西村(2017)は大学が障害学生支援を推進していく上で支援コーディネーター(専門職としての育成という意味)が鍵になると述べ、発達障害に関する知識だけでなく、学生との対話力、必要な支援を導き出すアセスメント能力、学内外との部署や機関との協働も重要な役割であり、組織マネジメント力も兼ね備えた人材が必要と述べている。また日本福祉大学の事例を取り上げ、障害学生だけでなく、その学生を支援する学生(所謂、ピアサポーター)も成長する仕組み作りを取り上げ、ピア・サポーターによる支援の重要性を述べた。また同じく日本福祉大学の事例において障害学生自身のセルフコーディネイトを目的とした支援の仕組みを構築していると同時

に支援学生(ピア・サポーター)の成長するための仕組みも取り入れており、ピア・サポーターによる支援が支援体制づくりにおいては必要不可欠になっていくという。

仲(2012)は鈴鹿国際大学で実施されているピア・サポートに着目して、7人の学生に記述式のアンケート調査を行い、鈴鹿国際大学における障害学生の支援について、ピア・サポートを行うと彼ら自身のリーダーシップ、自尊感情、人間関係スキルなどの向上に役立つと主張している。アンケートの結果より彼らの心理的発達について、対象学生の声に耳を傾ける、障害に対する偏見を持っていたことに気づき、彼らが持っている特性を如何に生かすかについて考えるようになる、サポーター自身の行動の変化にも影響を及ぼすというようにサポーターにとって有益にはたらいていることを実証した。具体的な影響に関してはこれまで持っていて障害者に対する偏見が変化したことやコミュニケーションを取ることの大切さといった影響がある。

仲(2012)では、人間関係スキルと対象学生の声に耳を傾ける能力をそれぞれ別の事柄として記載していたが、本稿では1つの事柄として検証していく。理由として、人間関係スキルにおいて、相手と会話することや情報のやり取りなど社会で生きていくために必要な能力が人間関係スキルにあたると考え、対象学生の声に耳を傾ける能力も相手の話を聴くことと同義であると捉えて、本稿では1つの事柄としてまとめる。

以上より、先行研究では学生ピア・サポーターによる支援が高等教育機関においては必要不可欠であり、またピア・サポートを行うことによる影響としてリーダーシップ、人間関係スキル及び対象学生の声に耳を傾ける能力、障害に対する偏見の自覚、障害学生の特性の理解、自尊感情の5つがある。しかし2つの先行研究では障害学生を支援することによる具体的なメリットが十分に示されておらず、またピア・サポートを行うことで上記の5つの影響がその通りに及ぼすか疑問に感じたため、本調査では、学生ピア・サポーターが支援に関わる具体的なメリットとその及ぼす影響について検証していく。

第三章 調査概要

現在、富山大学の「障害学生を支援するボランティア団体」(通称：ピアとみ)は実際に障害を持った学生への支援を行っており、学生ピア・サポーターも支援活動に参加している。筆者も支援活動に参加している。

そのため、彼らの役割や位置づけ、ピア・サポート活動による学生ピア・サポーターへの影響を分析するために、学生ピア・サポーターとして活動している学生を対象にアンケートを実施した。以下にその情報を載せる。

【アンケート内容】

名前、学年、学部、活動し始めた時期、活動参加の動機、行ってきた支援活動、学んだこと、支援を行って対象学生と交流したいか、の8点をアンケートで質問した。

アンケート対象者は7人(2021年3月時点)として実施。全員から回答を得た。

【アンケート実施概要】

2021年3月上旬に実施。

回答数7人中7人全員より回答あり。

・インタビュー

第1回 2021/03/19(金) 午前10時 zoom 人文学部Sさん(当時4年)

第2回 2021/03/24(水) 午後1時 zoom 理学部Hさん(当時4年)

第3回 2021/03/25(木) 午後7時 zoom 経済学部Mさん(当時4年)

第4回 2021/03/29(月) 午前10時 大学内(対面) 理学部Oさん(当時2年)

第5-1回 2021/05/29(土) 午後3時 zoom 理学部Iさん(当時社会人1年)

※録音は不可ということだったので、発言引用は少なくなる

第5-2回 2021/09/04(土) 午後2時 zoom 理学部Iさん(当時社会人1年)

第6回 2021/08/13(金) 午後2時 zoom 経済学部Oさん(当時3年)

第7回 2021/08/24(火) 午前10時 zoom 人文学部Sさん(当時3年)

・それぞれのインタビュー相手の詳細情報

①人文学部Sさん(当時4年)=S1と略す

現在は大学院生1年で、大学では学生ピア・サポーターとして活動していた。

②理学部Hさん(当時4年)=Hと略す

現在は社会人1年目で、大学ではSさんと同様に学生ピア・サポーターとして活動していた。

③経済学部Mさん(当時4年)=Mと略す

現在は社会人1年目で、大学では上述した様に学生ピア・サポーターとして活動してい

た。

④理学部 O さん(当時 2 年)=O1 と略す

現在大学 3 年生で、前述した人達と同様に学生ピア・サポーターとして活動している。

⑤理学部 I さん(当時 4 年)=I と略す

現在社会人 1 年目で、前述した人達と同様に学生ピア・サポーターとして活動していた。

⑥経済学部 O さん(当時 3 年)=O2 と略す

現在大学 3 年生で、同様に学生ピア・サポーターとして活動している。

⑦人文学部 S さん(当時 3 年)=S2 と略す

現在大学 3 年生で、学生ピア・サポーターとして活動している。

また第四章でも述べるが、富山大学の事例において『アクセシビリティ・コミュニケーション支援室』のスタッフにもインタビューしたので、以下に記載する。

・インタビュー

2020/08/11(火) 午後 4 時 学生会館 2 階 小会議室

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室スタッフ 日下部貴史さん

第四章 富山大学の事例

本稿で出てくる富山大学障害学生支援における用語や富山大学での支援の在り方について、支援室のスタッフである日下部さんのインタビューを基に説明する。

第一節 富山大学の障害学生支援について

第一項 支援室と支援部門

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室という部署があり、「トータルコミュニケーション支援部門」と「身体障害学生支援部門」の2つの部門分かれている。前者は全ての学生を対象にコミュニケーションの問題や困難さの包括的な支援を行う。主に発達障害学生への支援を行っており、学生本人からの相談だけでなく、教職員や保護者からの要請も支援の出発点とする。後者は身体障害・聴覚障害・肢体不自由・内部障害の学生の支援を行っており、学生ピア・サポーターの要請も行っている。障害学生が大学生活を送るために必要な機器の貸与など行う物的支援や学内事情に詳しい学生ピア・サポーターが中心となって支援する人的支援がある。

学生ピア・サポーターの養成内容として「ピア・セミナー」（以下：セミナー）と言って、身体障害学生向けの移動介助の講習会や聴覚障害学生のためのパソコンノートテイクの講習等、実技や知識の定着や「ピアランチミーティング」（以下：ピアランチ）と言って、平日の昼休みを利用して、身体障害学生・学生ピア・サポーター・支援スタッフが交流も兼ねて、今後の支援実施計画や支援内容について話すといったことを行っている。学生ピア・サポーターとして参加したい場合はピアランチに参加してそこで説明を受けて、支援室のスタッフに登録用紙を提出すると学生ピア・サポーターになれる。また実際に支援活動に入った場合、謝金が支払われるという有償ボランティアという形を採っている。

第二項 チャレンジカレッジ

富山大学学生支援センターアクセシビリティ・コミュニケーション支援室では2012年度から「チャレンジカレッジ」という将来的に大学への進学を希望している発達障害のある生徒に対する大学体験プログラムを実施してきた。毎年8月下旬に行われており、参加費無料で定員は10名である。また「チャレンジカレッジ」は、学生ピア・サポーター養成の一環として行われており、学生ピア・サポーターが先輩役として参加し、事前準備から当日のプログラムと、スタッフと協力しながらも取り組んでいる。2019年度のプログラムでは、大学の時間割を実際に作成したり、実際に大学食堂や研究室に見学に行ったり、実際に発達障害を持っている先輩からのお話もあり、充実している内容である。

第三項 ノートテイク

講義内容や周りの様子等を紙に書き取って文字で伝えること。これらの作業を行なう人をノートテイカーと呼ぶ。またパソコンを使用して音声情報を文字で提供することをパソコンノートテイク(以下：PC テイク)¹と言い、パソコンで作業を行なう人をパソコンノートテイカーと呼ぶが、富山大学の場合は別々に区別せずに、それらをノートテイク、ノートテイカーと総称している。最近では、環境的に支援を提供することが困難な場合、通信設備を利用して、音声情報を遠隔地に送信し、文字情報を受信する遠隔パソコンノートテイクが増えており、富山大学でも遠隔 PC テイクの導入を進めている。富山大学では主に聴覚障害学生に向けて行っている。

富山大学では、具体的には聴覚障害学生の隣に座り、授業の音声をノートに文字化する。支援者は基本的に 2 人体制で行って役割分担している。PC テイクもほぼ同様である。また授業によって PC テイクで行うか手書きのノートテイクで行うかは変化するものの、支援の際はあらゆる情報を障害学生が得られるように、ノートテイカーは雑談も含めて可能な限り全ての情報を文字に起こし、参照されている教科書のページや先生からの指示、講義と無関係な雑談といった簡単な連絡については図 4 に示してある E-メモを使う。この支援活動は障害学生と同じ授業に参加して支援を行うので、授業時間内が主な活動時間である。勿論、支援要請がある時に活動する。

富山大学での支援に至る流れとしては、①支援を希望する学生は富山大学の障害学生窓口(支援室)に電話・FAX・メールのいずれかの方法で、連絡する。②学生本人(場合によっては家族含む)、関係部署の教職員、支援室のスタッフで面談を行い、授業等の支援内容の検討、学生ピア・サポーターの派遣、支援機器の貸与等について協議する。③支援を開始する。④支援を行っていく中で、適宜スタッフと学生が面談を通して、今後も支援を継続するか協議する。

そして支援する際は、図 3 の腕章や図 4 の E-メモ(その場限りでの連絡や周囲の様子等を記すのに活用したりする)、他にも手書きのテイクの際の用紙やクリップボード、PC テイクの際には PC が入った鞆も持っていく。また新型コロナウイルスが流行している現在では透明マスクも各自で配布されたものを持ってきている。

図3 腕章



図4 E-メモ



第四項 移動介助(移動支援)

車椅子ユーザーの学生、杖歩行の学生等を対象とした支援方法である。

上記のような障害学生からの要望や悪路日に学生ピア・サポーターが先導して前方の安全を確認しながら雨雪に濡れないように移動をサポートする。

主に移動に関する支援なので、授業の間の休み時間(富山大学では授業間の休憩時間が15分であり、昼休みが1時間である)が主な活動時間である。勿論、支援要請があるときに、活動する。

また同様に、冬季期間での活動では除雪のサポートがあり、除雪時の移動経路確保のために、車椅子専用駐車場やスロープを中心に除雪を行っており、これも移動介助(移動支援)の活動の1つである。

富山大学での流れは、上述した第3項の流れと同じ内容である。

第五項 ALP(アクセシビリティリーダー育成プログラム)

富山大学では「人にやさしい社会」をリードする人材であるアクセシビリティリーダー(AL)の育成プログラムを実施している。ALPは企業や地域に他大学と連携して進めているプロジェクトで、2004年10月に広島大学とマイクロソフト株式会社が開始したもの。2009年6月に産学官連携による「アクセシビリティリーダー育成協議会」が発足された。2010年より協議会に参画する全国の大学で実施されるようになった。AL育成協議会の会員は2019年3月時点では21団体加盟している。富山大学もその会員の1団体である。そのため富山大学の学生は誰でも参加可能である教育プログラムである。一般的な資格ではないものの、就職活

動でも活かせるらしく、現に富山大学の卒業生の中では実際の就職活動の面接で実際に企業の面接官から ALP について訊かれた例もある。

第二節 富山大学での支援について

富山大学の支援対象者は「障害を持っている」ことが鍵であり、医師からの診断があってもなくても「障害を持っていれば」支援の対象になる。富山大学の支援は修学支援を中心した内容であり、「実行を支える支援」である。これは事実を扱うもので、例えば課題提出が滞ってしまう学生に対しては週 1 日の面談を通してスケジュール管理の支援を行っている。肝心なのは障害学生の主体性を尊重しながら行うことであり、手段を提示したとしても相談者がその提案を断れば、その時点で支援者の為すべき事はなくなる。相談者がやることを表明すれば、やり方を説明して支援続行になる。障害学生にとって最善の方法を模索しながらの支援なので、提案までしか出来ないのである。

第三節 学生ピア・サポーター関連

日下部さんのインタビューによれば、富山大学で活動している学生ピア・サポーターは身体障害学生に対しての支援が中心である。支援活動については前述した第三項や第四項とあるが、実際に支援するためには障害学生から支援要請があって支援が必要と認められて、はじめて支援できるので、障害学生の要請次第になる。学生ピア・サポーターに期待している効果について学生ピア・サポーター自身がそこを居場所にするという効果をあげており、そこを居場所とすることによる学生自身の学生生活の活性化も効果としてあげていた。また大学生活において活動に参加することによる成長・変化を期待している。具体例として多様性をあげており、活動の中で多様性の意味合いを体感してもらうことが成長・変化に繋がると語っている。

以上が富山大学における用語や支援についての内容であるが、前述した第三節の学生ピア・サポーター関連において、期待している効果や成長・変化について具体例はあげているものの、果たしてそれが実際に学生ピア・サポーターが活動を通してそのように影響を及ぼしているかどうかは疑問なので、実際に学生ピア・サポーターにインタビューを行い、検証していく。

第五章 分析

富山大学で学生ピア・サポーターとして活動している人又はしていた人からの話に基づいて「学生ピア・サポーター」の役割・位置づけ・影響、また気になることも含めてみていくが、今回は活動に参加した動機・きっかけが二分化されているため、これを元にみていく。

第一節 動機・きっかけの違い

インタビューした7名の動機・きっかけをそれぞれ記載すると、S1は両親が福祉施設で働いていて小さい頃から障害者と関わる機会があったり、小学4年生の頃では1年間授業で障害者支援みたいなことをやっていたりと、小さい頃から障害者との関わりがあって、親の仕事や小学校での出来事があったり今後そういう活動をしたということに参加した。Hは自身の身内に身体障害を持っている人がいて、活動に参加することで何かに役立つと考えて参加をした。Iは自身が発達障害を有していて今まで多くの人に助けられた経験から自身も誰かを支援することで恩返し出来たらと思って参加した。O2は自身が大学を選ぶ際に経済と福祉のどちらを選ぶか迷う程に興味はあり、また同じ関心のある仲間を作りたいというものもある。更には自身がガールスカウト²というボランティアに参加していたり、はたまた自身が障害を持っていたり、また祖父が車椅子ユーザーになったことも相まって、障害とは縁があったという。

一方でMは1年生当時の自分がこのままの状態にいることに不安を覚えて、新しい事、色んな事をやってみた方が良くと考えて、元々興味のあるこの活動に参加を決めた。O1は学内メールで活動についての説明があったのがきっかけで、本人の目的は人脈作りである。その他に教員を志望しており、教員になる過程において介護等体験があって、その際のノウハウを得られると思って参加したという意識もあった。S2は大学のサークル・活動選びの際に高校生の際に部活動に縛られてきたために、比較的自由に動けるところで、このピアの活動が自由度が高くて且つ資格も取れるということに興味を持った。

S1、H、I、O2の前者4名は幼少期から障害と関わりがある。身内の関係や小学校での出来事、自身が当事者ということで、小さい頃から障害者や福祉関係に興味・関心を持てるような土台や環境が整っていることがいえる。一方でM、O1、S2の后者3名は興味はあるものの自身の現状への不安や人脈作り、そして資格取得といったどちらかという自身のために参加したといえる。そのため前者4名の障害者のために参加した人達と后者3名のそうではなく自身のために参加した人達という2つに分けることが出来るので、以降は2つに分けて分析している。

第二節 障害者のために参加した人達

第一項 障害に対するイメージ

活動していく中で障害に対するイメージについては、各々異なっている。

S1 の場合、アプローチは異なるものの以下の発言があった。

S1：知らないという状態が無ければ、もっとお互いに嫌なことをすることは無かったのではと思った。知らないということは、なかったことと同じなのかなって思った。ピア・サポートの活動もともかく、もっと色んな人も知ってもらわないといけないかなって。知ってもらえたら、もっと色々やりやすいところはあったかもしれないなって思った時は、ノートテイク始めた時はちょっと感じました。

活動に参加して支援にあたる際に、技術は実践を通して身につけるが、知識はセミナーなどを通してある程度補うことが出来る。富山大学でも支援に入る際に面談を通してどのような障害や困難があるのかをアセスメントしてから支援策を考えて支援を行う。それはある程度の知識があるが故のものであって、知らないとサポートは出来ない。また異常事態であっても要請があれば支援を行わざるを得ない。また「知らない」というのは周囲の関係においてもいえて、特にコロナウイルスという異常事態の中でも支援を行っているが、ノートテイクによる支援の実施の関係上、周囲の人たちと異なる行動を取る必要があったが、前述のようにコロナ禍で初めての支援だったこともあって、知らない人からすると理解に及ばないことが起こった。S1 は当時の共通教育棟での出来事を振り返っており、教授が『事情があってくっつきたい人は言ってお下さい。それ以外は離れて下さい』という説明があった。しかしノートテイクから離れた席に座っていた人が『何故自分達は離れないといけないのに、あの人はくっついてるの』という発言をした人がいたと S1 の後輩から聞いたという。どこまでその説明を聴いて認識しているかは把握できず、そのような発言をする人が出てしまったのだろう。しかしそれもそのような事情があって、またそのような活動があるということを「知らない」が故の出来事だった。なので「知っている」がもっと多ければ、支援においてもやりやすさはあったと語った。

H は障害に対して偏見があって、活動を通して考えが変わった。

H：セミナーを受けていて私も身内に障害を持った人がいるからといって、その人の気持ち、その人達の気持ちも分かるという訳じゃなくて。やっぱりどこか障害に対して偏見があった。だから私ももう少し視野広げて色んな見方を見ようと、障害に対して色んな見方をしようと思ったことに気持ちが変わっていった。チャレンジカレッジでも本当に普通の高校生か、本当にひとえに障害を持っているからといって、蔑むようなことをするのは良くないと感じたし、それぞれに得意不得意もあるだろうけど、それも個性として認めてあげるのがやっぱり一番なんじゃないかって思った。

自身の身内に障害を持っている人がいるからといって必ずしも偏見がない訳でない。Hも偏見を持っていたが、活動に参加するにあたって自身の見方や視野が狭いことに気付き、他の学生ピア・サポーターと同じように視野を広げて物事を捉えようと考え、気持ちを変えるという意味でALPや活動も最後までやりきることを決意した。そして活動を通して前述したように異なる視点で物事を捉えることや障害を持っているからといって必ずしもそのイメージ通りではないということを考えたり、総じて活動を通してイメージの変化が大きいと見受けられる。

Iの場合、当事者ならではの視点で語っていた。

I：障害を持った人は、その障害に起因するもの以外にも心に壁を感じる人が多い気がする。チャレンジカレッジでも障害を持っている高校生に話しかける時も、緊張もあってか「心の壁」を最初は感じたね。彼ら(障害者)は「普通」になりたがっている人が多い気がするよ。自分が「特殊」だから、それ(障害)を強みにしようって考えられるのは相当心がしっかりした人じゃないかな。

Iの発言を補足しながら説明すると、障害に起因するものは聴覚障害や発達障害などのことを指しているが、それ以外にも心の問題等で壁を作っていると考えた。心の壁は障害がある人が自分から作っている印象があると語っており、チャレンジカレッジにおいても障害がある高校生に話しかける時に壁を感じ、また本人も当時は壁を作っていたという。また障害がある人は人間関係において周囲から悪意を受ける可能性があり、壁を作る割合が多い気がして、ある意味壁を作りやすい環境ではあると語っていた。チャレンジカレッジにおいても心の壁はどんな人でも初対面で人と会うときはあるだろうが、この場合は障害学生からの警戒心・猜疑心を感じたという。また“彼らは普通になりたがっている”とあるが、この場合の普通は放課後に部活の人と遊びに行ったり、普通の教室で勉強したりというように所謂健常者と同じようなことを指している。また“障害を強みに出来るのは相当心がしっかりした人”とあるが、自分も同じ健常者だったという憧れや、自分には出来ないという自身への幻滅があると考えて、障害があるが故の差違の存在に悩んでいるのではとIさんは考えた。そして本人も同じように経験したからこそ、チャレンジカレッジに参加した人にもそのような迷いがあったのではと語った。

O2の場合は、以下のような発言である。

O2：障害に対してのイメージは元々柔らかい方だったというか個人差が大きいものだっていうのはピアに入る前から思っていました。基本出来るじゃんって。障害はそこまで日常生活とかけ離れていないし、特別視もしてなかったんで、イメージの変化はな

いですけど。サポートした学生さんも実際に聞こえているかよりはコミュニケーションは結構取れているので、普通に接してるし普通にやれてますね。

O2 自身が障害があるということも関わっているからこそその発言とも受け取れるが、富山大学での聴覚障害に限らず、肢体不自由や発達障害などでも出来ないことに関しては文字通り出来なかったり、特徴があるだけで障害がない部分に関しては健常者と同じ能力を有している。また「サポートしなきゃ」という“義務”ではなく、日常でいう「その塩取って」、「良いよ」っていう『ちょっと助ける』という感じと捉えている。また O2 にとって障害は、身体障害といったものだけでなく、高齢者で目が見えなくなったことも障害と捉えていて、この文脈はノーマライゼーションの考え方を基に語っている。本人の感覚としてみんな一緒に暮らせる隣の人という感覚と語っていた。

まとめると、4 名で感じ方は異なっているが、そもそも障害について等知らないと支援する上では良いものを提供できない。偏見については H は例え身内に障害がある人がいても偏見がないとはいえない、但しそれは今までの自分の見方・視野が狭いだけで色々な人や出来事に触れることで障害に対するイメージは変化した一方で、O2 は元々障害があっても本人で出来る事柄はある。支援において障害があるからといって助けないといけないという義務ではなく、日常にもあるようにちょっと助けるというニュアンスで良いという。I は当事者だからこそその視点で障害がある人は周囲との差を感じているために心の壁を作るという。障害という周囲とは異なる状況にあたっているために障害がある人と接するとどこか距離感があって接しにくいということになり得るという。

第二項 学生ピア・サポーターの意義

活動を通して彼らは学生ピア・サポーターについてどのように捉えているのだろうか。

S1 と I は「同年代であること」について語っている。

以下が S1 の発言である。

S1：同じ学生であるということが一番大きいのかなってあって、同世代とかって話しやすかったりとか、まだ話しやすいかなって。まだ関係を構築しやすいのかなっていうのもあるし、あと同じ世代だからこそ気付くこともあることがきつとあると思う。学生がその活動をすることによって、それぞれの関係性で広がりやすいかなって。同世代が活躍しているということが大きいかなって。

同世代が支援活動に参加していることによって、周囲の人達への一種のアピールにもなる。実際に語りにもあるように S1 は自分が活動に参加することによって学生ピア・サポーターの名前や具体的な活動について知ってもらったとある。同世代だからこそ気安さがあり、且つ支援や他愛のない話においても話しやすさがあるという。また同じ学生だからこそ科目やシステムは違えど同じ大学の講義を受ける同胞、同じ授業を受けることだってあるだろう。その時に過去の経験が生きてくる。授業を受ける際の留意点や講義内容や試験内容だと「雑談に見えて実は内容にも関わってくるから、ノートテイク用の紙に書く」とか学生ならではの視点もあって、それらを把握しているため、実際にノートテイクなり活動する際に活かすことが出来る。これは学生だからこそ気付く視点であって、もし年が離れると行き届かない部分もあると語っている。そして I も同年代について語っていて、対等に“近い”人のコミュニケーションをする機会の存在として学生ピア・サポーターの意義(第三項)を語るが、同級生とは異なる存在だという。以下にその発言がある。

I: 保護者っていうのと対等っていうのは、二項対立じゃなくてスペクトラムだと思うのね。保護者の意識が強い人もいるけど、中間ぐらいの人もいて、1 人の人の中にそのどっちかの幾つかの要素が幾つかのバランスがある。だからある程度保護—被保護の関係性も保ちつつ、また対等なコミュニケーションも取れるということで、丁度保護される子供から対等に渡り会える大人、橋渡しじゃないけど、そういうところが出来るところが大学のピアの強みじゃないかなとは思う。

同級生と学生ピア・サポーターの違いについて言及しており、同年代ならば確かに同級生でも良いのではないかと考える。しかし学生ピア・サポーターは謝金を貰っているという制度上の都合があるとはいえ、助けるという前提がある。障害学生は高校生までは親や先生といった障害学生が「保護される」立場でのやり取りが多いが、大学になると同級生とのやり取りが多く、学生ピア・サポーターも同年代ということで、対等に近い人のコミュニケーションの機会の存在としてあげている。しかも学生ピア・サポーターは 1 歩離れて接するという踏み込みすぎない位置から接する存在且つ同世代だからこそ関わりやすいという位置にいる。高校までは同級生と接する機会は少ないし、かといって健常者と一緒でも悪意に狙われやすい可能性があって「保護される」立ち位置になる状況下でのコミュニケーションが多かった。大学では保護—被保護というよりは対等に近い状況になる。そしてその過程の辿る上で学生ピア・サポーターは重要ではないかという。

H の人は「支援・障害を持った人にとっての居場所」と言及している。

H：その学生ピア・サポーターがあることで支援、障害を持った方の居場所・よりどころになってくれればなあって。でも支援室もやっぱり学生と関わるところでは中々支援が行き届かないところがあるから、その学生同士で助け合えればなっということ、ピア・サポーターがあると思う。障害があるからといって不安を持っている方も多いから、私達と同じように私達と変わらない大学生活を送れるようにサポートすることが意義だと思う。

富山大学のように支援体制が整っているところが私立では少ないことに言及して、国立大学である富山大学は環境に関しては恵まれているため支援を受けたい側からすると良いところであると考えている。しかし支援室のスタッフも介入出来ない部分があり、その部分に学生ピア・サポーターが入って助け合うことが1つあるという。そして障害学生だろうが、誰しもが同じように大学生活を送るためにサポートすることが学生ピア・サポーターの意義と語る。

O2は「障害の存在を知る」とことと視点について言及があった。

O2：そういうサポートの必要のある人のことを認識するというのがまず大事。障害とか困難性の存在を知ることがまず第1の意義ということであると思う。学生だとより日常に溶け込んだ存在になるのかなと思う。あと『仲間』も良いと思っていて、集まることで1つのことに向かえるし、「知ること」とか他の人の視点を得ることが凄い大事。活動に参加することで自分の立場、自分の能力以外に気がつくようになるのは大事だと思う。

前述のS1でも述べたように存在を知ることが1つの意義。これは「“知らない”ことは“なかった”ことになる」というS1の発言を言い換えた言葉である。存在を知った上で、支援するにあたって学生ならばより近い存在になることが出来る。また同じように学生ピア・サポーターとして活動する人と関わる事で自分には無かった新しい視点を得ることが出来て、視野を広げることが出来る。活動しなければ障害がある人や車椅子とか考える事はないし、自分のことについて気がつくようになることも1つあると語る。

まとめると同世代だからこそ周囲に自身の活動についてアピールできたり、障害学生とコミュニケーションを取ったり関係性が構築しやすかったりして、また障害者自身でも今まで保護される立場にいた分、対等に近い人とのコミュニケーションの機会に触れることが出来て、その格好の対象として学生ピア・サポーターがいるという。そして活動に参加することで障害や障害がある人について学べるだけでなく、同じ学生ピア・サポーターと関わる事で自身の視野等を広げることが出来る。

第三項 支援を通して感じた事

前述した二項以外にも4者の共通発言として「コミュニケーション」について言及している。しかしどのようなことをやっていてそのように感じたかの経緯が異なる。

S1の場合はチャレンジカレッジの参加によって感じたところがある。以下がその発言である。

S1：コミュニケーションを取ることって、大切なんだなって思って、その出来る事までお手伝いするというのは違うから、どこからお手伝いが必要というのが、ちゃんとお互いに話して分かってというのが、大事なんだろうからほんとにコミュニケーションを取って支援していくというのが本当に大事と思ってやりました。チャレンジカレッジを通して、ピア・サポーターとして活動していく内にコミュニケーションを取っていくのが大切なんだなって感じた。

障害学生を支援するにあたって、具体的にどのような障害を有していて何が出来ないか、そしてどのようなことを支援して欲しいのか等を個人面談を通して把握して、実際に支援していくのが流れである。富山大学でも相談の流れとして、①当事者が支援室に連絡して、②困り事等を相談員が話を聴いて、③今後のサポートや相談の方法を決めていき、④支援室でのサポートを開始するという流れである。しかしチャレンジカレッジにおいて学生ピア・サポーターは参加者の先輩役として参加しており、事前にペアを組む相手の情報を伝えられていても富山大学の通常の支援では、定期的な個人面談をしており、適宜支援内容をかえたりして障害学生にあった支援をしているが、チャレンジカレッジでは僅か1日の数時間だけであり、その中でより良い支援をするためには障害学生がどこまで自分で出来ることがあって、どこからが支援が必要かということをはなしながら接しないと支援は難しいという。本人にとって良い支援をしていく上で本人の能力と出来ない事を把握していく上での話し合い(=「コミュニケーション」)が大事と語った。そしてそれは通常の支援においても同じであるとS1は考えた。

Hの場合は、全体の活動を通して「コミュニケーションの大切さ」について学んだと言っており、具体例としてノートテイクでの例を挙げてくれた。以下にその発言を記す。

H：コミュニケーションとか取るに對話、ちゃんとお互いの意見を聞き合っていくことが大切なんだなとは感じていた。あとは障害を持っているから全部出来ないんじゃないじゃなくて、耳が聞こえないからといって全てが出来ないわけじゃないし、勿論個人個人出来る事はあるわけだけど、それをサポーターが全部やっちゃう

と、余計に支援者が申し訳なさを感じちゃうしするから、そこはサポーターとして気をつけなきゃとは思った。

H にとっての「コミュニケーション」は対話・お互いに意見を言ったり聴き合うことで、支援者が一方的なものだと障害学生にとっては良い支援とはいえない。それこそノートテイクにおいては障害学生(その他も然り)が見やすいものと授業内容の補足の強化や自己学習における理解の促進になると考えられ、そもそも障害学生も 1 人の学生であって教育を受ける権利は有している。支援するにあたって前述の S1 も発言しているように、本人の能力を把握することはもちろん、今回の具体例では見やすいかどうかというように一方的な支援ではなく、互いに意見を言いながらより良い支援にしていく。そのためにはお互いに意見を言って聴くといった対話(=「コミュニケーション」)が大事だという。

I の場合、自身が障害があるため、当事者の視点でのコミュニケーションについて言及している。また I にとってコミュニケーションは学生ピア・サポーターの意義(第二項)にもかかってくる。以下にその発言を記す。

I : 学生がサポートする、同年代がサポートし、会話するということは、それだけで大きな意味があると思う。あと小中高と進むにつれて段々コミュニケーションを取る必要のある人の幅が広がっていく。その時、先生や親といった保護ー被保護者の関係の人と同級生や先輩後輩といった対等に近い関係の人、どちらのコミュニケーションも大事で、その 2 つのコミュニケーションが上手くバランスするように手伝いをするのが学生ピア・サポーターの役割だと思う。

I によると、高校生までは親や先生といった障害者自身が「保護される」ような立ち位置になる人とのコミュニケーションが多く、同級生とのコミュニケーションは乏しい状態である。しかしやがて大人になっていくにつれてそのような立場が上の人に甘えるようなことは出来なくなっていく。もちろん親や先生といった人達とのコミュニケーションは大事だが、あまりにも“自分は守られて生きている”という意識が強くなると、対等に近い人たちとのコミュニティに入ることが難しくなってしまう。もっと言うと将来立場が上になる所謂「保護する」立場になった際に果たして上手くやれるのだろうかという疑問も生じる。障害がない人(健常者)でも成長の過程で「保護される」意識から段々対等になっていくところになって最終的に「保護する」立場に回る上で双方のコミュニケーションが必要になると考えている。これは特段難しいことを言っている訳ではなく、今後様々なコミュニティに適応するために不足しがちだった同年代とのコミュニケーションを経験することが必要であり、それはどの人も少しずつコミュニケーションの練習

をしていって大人になっていく。ただ障害がある人は成長がゆっくりなだけという。そのためⅠの「コミュニケーション」は一般的な人間関係における会話のことであって、コミュニケーションを取る対象(同年代)について、言及している。

O2の場合、ノートテイクの活動の中で「コミュニケーション」について言及している。以下にその発言を記す。

O2：授業の席に座る席や改行いっぱい多い方が良い人とか、人によってはいっぱい文字あると困る人もいれば、いっぱい1画面で前の話遡って見たい人もいるので、そこは生徒さんと相談してっていう形で生徒さんとコミュニケーションしながら作り上げるノートテイクっていうのを感じてますね。何か一方的に「こうします」ではなく、お互いに「どれが良いか」とかの話し合いになっているというのがあります。割とコミュニケーションは円滑にいつていると思います。

前述のS1やHの人と同様に支援を行うにあたって、その人にとって都合の良い方法は異なっており、今回はノートテイクという具体例においては“見やすさ”という観点で授業を受ける際にノートテイクが打ち込んだ内容が見えるかどうかは人それぞれなので、お互いに意見を交わして、学生ピア・サポーターは改善しつつ、より良い支援を行っている。やはり障害学生にとって良い支援を行うには、障害がある人の障害の程度や本人の能力、そして今回の“見やすさ”といった観点で、お互いに意見交換等をして試行錯誤して支援している。よってO2の「コミュニケーション」は相談をしてお互いに話し合いをしていくという意味合いで語っている。

しかし反対に個々によってまた感じた事があったりもする。

S1の場合、このような発言があった。

S1：障害があることで日常生活を送るときに不便な部分はたしかにあるけれど、誰もが得意なこと不得意なことがあるということと同じなのではないかと考えるようになった。支援はなにも特別なことではなくて、誰かが不得意な部分を、そこが得意な人で補うことだと思ったし、障害の有無関係なく、互いを補い合って助け合うことができるのがピア・サポートだと学んだように思う。

以上の語りでは分かりにくいので補足すると、S1が言うには、支援と言われると技術や知識が完全にある状態で支援することが出来るというふうに捉えるが、実際にS1達が完全に知識がある状態で活動しているかという点、そうではない。必要な知識等は勉強するが、技術は実践を通して身につけていくので、ほぼゼロに近い状態で活動を始めている。技術も無い状態で活動に参加して、実践を通し

て技術や知識を身につけているため、そう考慮すると普通のイメージにある支援ではないと感じ、やっていく中でスキルアップしていくような感じで、S1も支援はスペシャリストが来ると思っていた。しかし活動の中で新たに活動に参加してきた後輩を見ると、全然支援に普通に入っても困らないレベルで、実際にノートテイクなり入っても問題ないレベルの人が多いと語っていた。スペシャリストが支援するというのはあるが、それだけでなく、学生ピア・サポーターというのは同じ学生だから、スペシャリストという訳じゃない。だから本当はそこまで特別な事として捉えなくても良いと感じるようになったと語る。結局支援は得意な事を得意な人が行い、不得意な人の不得意な部分を補っていることと同義と考え、それを支援と考えると日常生活においても『この部分私出来るけど。この部分はちょっと苦手だから誰か得意な人これやってくれないかな』ということと一緒に思い、特別なことではないと語った。

O2は、「目線・視点」について以下のような発言があった。

O2：気になったことはやっぱり目線としては、不親切だなとか表示とかに目が行きがちになるのはありますね。やっぱり自分の視点として支援される側とか実際に関わる側の目線等が、より具体的になった。あと車椅子とかでもお店でも点字ブロックのように使う側の目線に立って考えるようになるのはありますね。

例示を含めての発言であったが、ノートテイクにおいてもその他日常生活の一場面においても、あるモノやコトにおいて使用する側の視点で物事を考えるようになった。話し方においても脈絡のない話や飛躍している話を聞くと混乱して理解出来ない可能性がある。また富山大学では聴覚障害学生にノートテイクを行っているが、授業中で視聴覚教材を使うとなったときに、映像に字幕がないと音声で得られる情報を普通の健常者は聞けるのに聴覚障害学生は聞けない。これによって得られる情報量に差が出来てしまい、一種の不平等になる。それを防ぐにはどうすれば良いかという視点を持つようになったということもある。字幕が駄目ならば事前に要約した資料を用意して、情報量の不平等を無くすということも可能などがある。それは後半の点字ブロックの話にも言えることであって、使う側にとって果たして使いやすいものかという視点で見ることがより具体性を持つて見ることが出来るようになったという。

まとめると共通部分として「コミュニケーション」というキーワードが挙げられる。細かい意味合いは異なっているが、相手と話すこと、相手と意見の摺り合わせをするといったことが支援を通して感じたと語る。またそれぞれの意見でも実際に活動していく内に技術が身についたり、またコミュニケーションといった概念上の学びを得られたり、同じ学生ピア・サポーター同士で交流することによ

って自身にとって新たな視点の獲得というように色んな影響があることが分かる。

第三節 自身のために参加した人達

第一項 障害に対するイメージ

M の場合は以下の発言に見られる。

*M: 全部やってあげるんじゃなくて、手伝ってあげるみたいな、それが助けると
いうことなのかなって。*

活動を始める前、障害がある人のイメージは「助けてあげないといけない」と思っていたが、実際に活動に参加することによって結構障害の度合いは軽い人もいることに気づいた。今までは全部やらないといけない駄目と思っていたが、ある程度自立させてあげて、やれることはちゃんと自分でやってあげて、それでもどうしてもやれないことを手伝ってあげるということがお互いのためと語っている。障害があるといってもその障害の度合いは異なる。また本人の出来る能力も異なるので、自分で出来ることをやらせて、本当に本人が困っている事柄に関してはサポートすることで、本人の能力の活用を維持しつつも本当に必要な支援を行うことが出来るという。

O1 は本人の家庭環境による影響がかなり大きい。以下に発言を記す。

O1: 可能な限り障害を持って生まれてくる人は減らすべきだと思ってる。視覚障害・聴覚障害のように社会に溶け込める人であれば技術も向上するので、社会も許容できると思うが、重度の障害になると見捨てざるをえない時がくる。

O1 の家庭環境が背景として大きく関わっており、O1 の従兄弟が後発性の発達障害または知的障害のどちらかで、施設とかのサービスに通ったら普通の発達までいけるのに、その人の叔母が全く連れて行かなかった。所謂育て方が悪かったという。叔母は従兄弟の面倒を祖父母に丸投げするまでだそう。O1 も従兄弟に構って少しでも負担を減らせるかと思ったが世話を見切れないと苛立った。またインタビューの中では「地域猫」³の取り組みや沖縄県で発生した訴訟⁴についての例示を示して、障害に対しての意見を発した。また NHK のニュースを O1 が見た際に身体障害者の就労についての内容で、身体障害者が仕事しているのを見て、市役所の人が褒めているというものだったが、O1 曰く、健常者であるその人が仕事すればその分の生産性があがるのではないか。この資本主義の世界でそのように考えると障害者は淘汰されてもおかしくないという。視覚障害・聴覚障

害の人は社会の生産性を損なうことは少ないと思うが、重度の障害がある人であればいずれ見捨てざるをえない社会が来るだろうと語っていた。但し本人はこの発言が良くないことを自覚して発言している。

S2 は以下のような発言をしている。

S2：障害は身近なものであることが1つ目と障害は多様なモノがあるんだなっていうのが2つ目とあとはチャレンジカレッジとかノートテイクとか実際にその子達と関わることで障害にも程度があるってそれは本当に驚いたのが3つ目。あと複数人接しないと知らなかったのが4つ目。

S2 は小学生の時から支援学級の子と関わることがあったり、高校の入学式の時の当時の校長先生が色覚障害がある人だったというように、本人が思っているよりも幅広くあって、見ただけや話されないと分からない障害とかあることを感じたという。また本人自身は障害という概念を型にはめていた感じがあったが、支援をしていく中でその人にあった支援方法はそれぞれ異なっていることと障害がある人の「出来る事」にも着目するようになったという。小学生の頃は支援学級の子といることが多かったが、「出来ないこと」を主にみていた。しかし活動を通して「出来る事」にも気付くようになり、それと同時に実際にノートテイクに参加することで、聴覚障害があっても障害の度合いが異なることにも気づいた。みんな違うということと決めつけることは良くないし、セミナーやノートテイクといった活動等で学びつつもその学びが全てではないことも言及していた。

まとめると3名に共通する部分としては、障害があっても本人自身がやることをやらせるという主体性の尊重である。M と S2 は語り部分や補足でもあるように、障害があっても本人自身が出来る事があって、それに気付いて出来る事をやらせてあげるようにすることに言及した。O1 も限定的ではあるものの技術の進歩等によって社会に溶け込めるような人であれば社会の生産性を損なうことは少ないと言及しているが、全体的にいうと障害に対するイメージは悪いままである。しかしそれでも活動に参加しているのは、一理に本人自身でも依然として答えを出していないからこそだと考えられる。

第二項 学生ピア・サポーターの意義

M は学生ピア・サポーターの意義について以下のように語る。

M：自分の成長だね。最初は自己満足でしょと思ったけど、支援活動をしていく内に何か変わったよりかは結局成長という面では同じなので、割とピア活動は成長の場になるんじゃないかなって思います。

活動を始めた当初は誰かを助けることで自分が気持ちよくなる、誰かのために尽くしている自分が気持ちよいというイメージだったが、ピア活動をしていく内に今までの自分とは異なる新しい自分に昇華出来るという。具体的には支援活動を通して障害学生を助ける時に、助けるためにどういう過程を経て、より良い支援にするかの試行錯誤をする。「こうした方が良い」とか考えることで思いやりや思いやれる力とか養える。そのように試行錯誤している内に高い次元に昇華出来るという。そのような意味で自分の成長について言及している。

O1 は以下のように発言している。

O1：サポートする側の数あわせとして存在しているのが我々学生ピア・サポーターなんだろうなって思う節はあります。しかしそれは必要であると同時に学生が自ら支援を行うことによって他の学生に興味を持って貰うことが出来るし、参加した方々はより支援に対して深い考えを抱くことが出来る。あと同世代だと支援される側からみたら違和感を感じにくいんですね。

新規で障害学生が入学して支援する際に多くの学生ピア・サポーターが動いており、それはやむを得ない動きと考えている。仮に2名が1週間乃至2週間ずつつきっきりで入ることが可能でも、それは支援する側にとってキャパシティオーバーであり、支援専門の人を雇うとしてもつきっきりでいることは難しい。そのような状況になった時にサポートする側の数あわせとして学生ピア・サポーターがいると語った。しかし必要な人間であるし、学生が自ら支援を行うことによって他の学生に影響を与えるとも語っている。S1の語りでも似たようなことがO1にも起こっており、当時ノートテイクをしていた際に支援を受けていた障害学生と同じ講義を受けていたO1の後輩が居て、講義後にO1がピア活動に参加している事を話して且つ当時の聴覚障害学生の存在も知っていて活動があることをその後輩に話したという。最終的にその後輩は活動には所属しなかったものの、他の学生にある種のアピールをすることが出来たといえる。また支援する際に支援員みたいな大人がいると周囲から訝しく思われる。そういう違和感を支援される本人が抱くかは別としても支援する側、支援される側も不快感を抱いてしまいかねない。そのため同世代で支援することでストレスの軽減になると語る。

S2 はいくつかあげている。

S2：ピア・サポーター同士だと上下問わず知り合えるっていうのが本当に大きいとは思っている。あとただ何をしなくちゃいけないという義務がないっていうのが一番大きいですね。あとは違う立場の人と関われるのが良いですね。

同じ支援活動をしている仲間との交流について言及しており、S2 自身が学生ピア・サポーターに所属する決定打として学生ピア・サポーターと関わりがあるスタッフの方と学生ピア・サポーター達の朗らかな緩い雰囲気に着かれて所属したと語っている。また S2 はピアランチの存在に助けられたとも語っており、他愛もないやり取りが落ち着いたという。この活動は部活動やサークルと異なる組織で、活動に縛られすぎず且つ活動は本人の活動を優先した上で参加しても良いという形式をとっており、本人自身の用事を優先して活動に来なくても良いという緩い感じで、授業では発表なり役割を果たさないといけないが、この活動では特にないために、本人が逆に何しようかなと意欲的になれると語っている。違う立場の人と関われる点においては活動に参加するようになり、支援する立場になったことで深く知ろうとしたり、考えたり調べたりしようと思ったと語る。また支援する立場にならないと自分事として捉えないと語っており、授業を受けたとしても実際に経験していないために他人事としてみるし、まず理解・想像できない可能性がある。そういうものは実際に関わることで分かることがあるという。あとは支援活動をする中でスタッフの方と関わる事があって、スタッフの方からの経験談や体験談等も凄く勉強になると語っている。

まとめると3名の発言の内容はそれぞれ異なっている。活動の中でより良い支援を考えていく過程における自身の成長やスタッフではカバーしきれないためにある一方、活動することによって周囲にアピールすることが出来ること、そして異なる立場の人との交流による刺激を得られたり、縛られないが故に意欲的に活動出来るというように自身への成長といった影響だけでなく、周囲への活動に関するアピールをも出来ることがいえる。

第三項 支援を通して感じた事

本章では前者4名と後者3名とに分けて分析しているものの、第二節第三項と同じキーワードが後者の中でもみられる。それは「コミュニケーション」に関するもので、以下にその発言が見られるMとS2の発言を記す。

Mは以下のようにある。

M: 凄く大事なのが、ノートテイクを受ける人とのコミュニケーションって言っていて、自分が疎かにしていたところがそこで、ノートテイクを受ける人とあまりコミュニケーションを取って無かったので、そこはちょっと反省してます。

本人の失敗談からの発言になるが、活動を通してノートテイクを受ける人とのコミュニケーションについて言及しており、障害学生からの要望といった内容をメ

モするなどは大事なのだが、Mはこの部分を疎かにしており、その影響で本人にとって重要な部分が抜けていたこともあって、以上のようなことを発言した。また S2 の場合は以下の発言がある。

S2：コミュニケーションや人と関わる大切さ、様々な視点で考えること、学び続けることの必要性、和やかに過ごせる場の温かさについて学んだ。

S2 のインタビューを通しての総括にあたる発言であるが、その中にもあるように「コミュニケーション」について言及しており、ノートテイクにおいて本人は練習を通してタイピングの速さなど技術の向上は自覚していたが、どの文で改行するか等は実際に聴覚障害学生に教えて貰ったり、また障害学生からの要望があった際は改善したり、お互いに障害学生にとって良い支援にするための意見の組み合わせ(=「コミュニケーション」)があって出来ていると語る。

一方で O1 も以下のように感じたという。

O1：同じ学生だからこそ行える支援もあれば、技術を有しないからこそできない支援の存在も感じた。また、適材適所というようにそれぞれに沿った支援を行えばいわゆる健常者と同様に学習活動が行えることを感じたと共に、どこまでの障害を大学として支援できる相当かの見極めなくてはならないだろうことも感じている。

分かりやすく説明すると O1 曰く、ノートテイクだとタイピングの遅さや専門用語の打ち込み、移動支援でも支援される側からの支援する人の力量というように、文字の打ち込みや車椅子の移動というように簡単で出来るようなことでもタイピングの速さや正確な文字の打ち込み、乗っている人が安心できるような移動のやり方というように細かい部分まで気を配らないと出来ないことが存在する。ここが普通の学生と学生ピア・サポーターの違いの 1 つ。そして打ち込みが速い人ならば PC テイクをよく使うような支援に入ったり、書くのが上手ならば手書きの支援によく入るといったように学生ピア・サポーターでも得意・不得意な分野に合わせて入ったり、2 人で入る際に片方は社交性があった方がコミュニケーションが取りやすいというように得意な人が得意な分野で支援すると質の良い支援が提供出来るし、それは障害学生にとって良いのではという意味。そして大学でも入学して面倒をみれる障害の程度を考えて、予めどの程度の障害ならば受け入れられるという旨を事前に公表すると良いという。大学でも障害の程度というところで限界があると考えている。その反面、学生ならではの視点もあるという。SNS を介した学生同士のコミュニケーションネットワークの構築や前の席が

速く埋まりがちといった授業毎における特徴を言うといった学生だからこそその視点に立った支援も出来ると語っている。

以上より、例え参加する動機が違えど支援で感じた事において、前述した4名と同じように「コミュニケーション」について言及しており、お互いの意見の折り合わせという文脈で語られている。そして支援において学生ピア・サポーターでも得意な分野は存在するので、それにあった支援を行うと質の良い支援が出来る。それは研鑽を積んだ上で出来ることで普通の学生では細かい部分までは出来ない。また学生ピア・サポーターでも限界はあるが、逆に学生だからこそ出来る支援も存在することがいえる。

第六章 考察

第一節 学生ピア・サポーターが障害学生支援に関わるメリット

西村(2017)では学生ピア・サポーターによる支援が高等教育機関においては必要不可欠であると論じていたが、学生ピア・サポーターが支援に関わることによるメリットはどのようなものか。

1つ目は学生という同世代であることによる「コミュニケーション」の取りやすさや周囲への活動の広がりやすさがあると明らかになった。第五章の分析でS1の『同じ学生だからこそ関係の構築や気付くことがある。学生が活動することで、その中で関係性が広がる』、Hの『支援室でも中々行き届かないところがあるので、学生同士で助け合えばいい』、O1の『必要であると同時に学生が自ら支援を行うことによって他の学生に興味を持って貰うことが出来る』、Iの『同世代がサポートして会話することは大事だと思う』というように、同じ学生が支援に関わることで障害学生との「コミュニケーション」の取りやすさや周囲の学生へのピア・サポート活動への参加のしやすさやその活動のアピールといった、同じ仲間を集めることに貢献するという影響がある。同じく第五章の分析の中でもS1やO1のように活動に参加したことで自身の後輩に活動について話すことが出来たために、周囲に対するアピールが出来たと解釈できる。

2つ目はピア・サポート活動に対する気軽さがある。第五章第二節第一項のO2の『サポートしなきゃという”義務”ではなく、日常であるような”ちょっと助ける”という感じ』という発言や同章同節第三項のS1の『支援は特別なことではなく、不得意な部分を得意な人で補うこと』という発言があるが、別途そのように読み取れる発言を以下に載せる。

I: あまり活動に来ない人にも優しくしている。

S2: 縛られすぎないし、用事があれば来なくても良いよっていう断言出来る感じがいい。

Iの活動の様子を見たときやS2の参加する動機で語った内容だが、サポートというのは支援といった特別なものではないことと学生ピア・サポーターの活動自体が自分の用事を優先した上で参加出来るため、部活やサークルといった比較的規則が存在する集まりよりかは参加への自由度が高い。自由度が高いからこそ、個々人によって参加度合いが異なっても許されるような雰囲気や醸成されている。このように活動に参加することでピア・サポート活動は敷居が高いものではない且つ参加・不参加に対する気軽さがあることが読み取れる。

第二節 学生ピア・サポーターへの影響

仲(2012)ではピア・サポートを行うことでリーダーシップ、人間関係スキル及び対象学生に耳を傾ける能力、障害に対する偏見の自覚、障害学生の特性の理解、自尊感情の5つに影響が及ぶと主張する。では今回の調査ではどうだろうか。

1つ目は「リーダーシップ」だが、7名の発言の中でリーダーシップに関する発言はみられなかった。富山大学では基本的に視覚障害や聴覚障害といった身体障害学生に対して支援活動を行っており、また1人ずつに専門的に付き添っている訳ではないため、リーダーシップについて影響がなかったといえる。

2つ目の「人間関係スキル及び対象学生に耳を傾ける能力」について、人間関係スキルの1つである「コミュニケーション」について、O1以外の6名が「コミュニケーション」について言及していた。具体的にどのような意味合いでの「コミュニケーション」かは異なるものの、障害学生の支援を行うにあたって、障害学生でも健常者と同様に学生生活を送るためにより良い支援を考える。その際に障害学生の要望を聴きつつ学生ピア・サポーターもどこまで本人で出来るか訊きながらお互いに意見を摺り合わせて行っていく。このことから「対人関係スキルにあたるコミュニケーションの向上」と「障害学生の声に耳を傾ける能力」が支援活動を通して醸成されたことが明らかになった。

3つ目の「障害に対する偏見の自覚」だが、HとM、S2と3名が偏見があったと語る。Hの『身内に障害を持っている人がいるからといっても偏見を持っていないわけではない』、Mの『「助けない」といけない存在だと思っていた』、S2の『今まで出来ないことしか見ていなかった』と発言している。このことから活動に参加する前や活動に参加して実際に障害学生と会う前に抱いていた個々の考えは障害に対する偏見であったと自覚したと捉えることが出来る。その反面、O2のように始めから障害に対する偏見がなかった人もいるため、人によるところはあるが、少なからず「障害に対する偏見の自覚」においても影響があったといえる。

4つ目は「障害学生の特性の理解」についてだが、3つ目の偏見を自覚した3名のその後の行動に結果が現れている。Hは活動に参加して実際に支援活動やセミナーで学んでいく内に自身の見方や視野が狭いことに気付いて、気持ちを変えるために最後まで積極的に活動に参加したという活動意欲の向上がみられた。またMとS2は活動に参加することで障害があっても本人自身で出来ることがあることに気付くようになったと語っている。つまり障害学生の持つ能力に目を向けるようになったことが明らかになった。しかし活動意欲の向上や障害学生の持つ能力に視点を向けるとあるように、視野を広げるといった行動はあっても、詳細に障害学生が持つ特性にまで目を向けているといった発言が見られなかった。このことから、偏見を自覚した後は活動の意欲が向上したと本人の持つ能力に目を向けるようになったということが明らかになったが、詳細にまで目を向けるといった特性の理解は発言からはみられなかった。

5つ目の「自尊感情」であるが、7名の発言から明確な発言は見られなかったが、2

名の発言からは潜在的にそのように匂わす発言はあった。以下にその発言を載せる。

H：記入するノートがあって、それで頑張らないといけないなって気持ちになったし、タイピングを速く正確に打てるようになりたいと思ったのもあった。その一方で、2021年度に関しては、遠隔の方がノートテイク受けている方が凄く授業が分かりやすいというのは聞いてて、有難かったというのは嬉しかった。

S2：やっぱりお礼とか言われるのとかは嬉しかったですね。あと障害学生から行間を変えて欲しいって言われて改善したときに、「今日は凄く見やすかったです」って言われた時があって、その時は凄く楽しそうかなって、 अच्छも。

HとS2の2名の発言にあるように、はっきりとは明示していなくとも、「速く打てるようになりたい」や「お礼を言われて嬉しかった」といった出来事を通して、モチベーションがあがったり、ある種の自信に繋がったりとはっきり明示してなくとも何らかの形でそのように自尊感情にも影響を与える可能性はあると分かった。

そして今回の調査では新たな影響として支援技術の向上があると明らかになった。

以下にその発言を載せる。

O2：ノートテイクは段々効率的というかコツというか、なんかもう語尾変えて良いんだって、柔軟に対応出来るようになったかなって思ったし、自分のスキルにもなりました。

S2：その支援に繋げるために練習したり、前よりかは情報を取れるようになってきたかなとは思う。

多田：結構そのテイクとかやってみて当時よりかは結構出来ることとかー

S2：ー全然速くなったと思います。速くなりましたし、誤字はありますが、ブラインドタッチして「あ、間違えたな」というのが分かるようになって消すという一連の流れが速くなったと思います。

支援活動を通して支援技術の向上が語られており、S1の語りでも『ある程度知識とか技術とかみていたけど、実際に自分が技術がちゃんとある状態で入ったかというところでもない』というように、支援を行うにあたって技術はセミナーや実際の活動で練習や実習の機会を積んで、自身の技術として身につけていき、研鑽を重ねることで技術の向上に繋がると語っている。支援技術の内容はノートテイクなり移動支援の車椅子の支援なりで個々に異なるものの、支援技術の向上としては一括りで捉えることが出来る。

今回は学生ピア・サポーターが支援に関わる事のメリットや影響について論じたが、

第五章第一節の M のように自身の現状に不安にかられて何かに挑戦するといった、ある種自身の成長を目的として参加を決めた人もいる。学生ピア・サポーターの成長は参加したことによって成長があったという結果論だけでなく、学生にとって成長を期待できることがピア・サポート活動を行う動機にもなり得るという「自分の成長という動機の発見」が本調査でも明らかになった。同様に O1 も人脈作りといった目的や S2 は自由な雰囲気が動機となっていたが、その後において、M は「真剣に取り組んだ方が楽しい」といったこと、S2 は活動を通してより障害学生とのコミュニケーションを取るといった意欲があるなど、本調査で明らかになったこと以外の影響もある。それ以外にも O1 のように障害に対するイメージは悪いにも関わらず、依然として活動を継続しているといった、一見矛盾するような状況に置かれている。しかし本人はそのことについては言及しておらず、これは本人自身でもまだ活動を通して本人自身の結論が出ていないためであって、その答えを探すために継続している可能性がある。

以上のように学生ピア・サポーターが支援に関わるメリットは同世代だからこそのコミュニケーションの取りやすさや活動の広がりやすさ、ピア・サポート活動に対する気軽さ。そして影響は対人関係スキルにあたるコミュニケーションの向上と障害学生の声に耳を傾ける能力の向上、障害に対する偏見の自覚とその後の活動において活動の意欲の向上や本人の持つ能力に目を向けること(視点の向け方)、支援技術の向上がある。そして可能性として自尊感情の影響があること。最後に結果としての成長を期待しているだけでなく、動機として自身の成長のために参加しているといった発見があることが本調査で明らかになった。

最後に高等教育機関で障害学生支援の窓口が設置されていても、学生ピア・サポーターといった支援学生を設置しているところは第一章で述べたように少ない現状である。今回の調査で学生ピア・サポーターへの影響や必要不可欠の理由が明らかになった。そのため、今後学生ピア・サポーターといった支援学生を設ける学校数が増加すること且つそのような活動に参加する学生が増加することを望んで、本論文の締めとする。

【参考文献】

西村優紀美, 2017, 「発達障害学生に対する支援体制の構築」, 『富山大学 学園の臨床研究』 p15~p20

仲律子, 2012, 「大学におけるピア・サポート活動について」, 『鈴鹿国際大学紀要』 p 147~ p 161

西本久子, 山本力, 2002, 「実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向」, 『岡山大学教育実践総合センター紀要』 第2巻 p81~p93

『富山大学 教育・学生支援機構 学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室 身体障害学生支援部門』パンフレット

[身体障害学生支援部門 \(u-toyama.ac.jp\)](http://u-toyama.ac.jp) (最終閲覧日 2021/06/21)

「“アクセシビリティリーダー資格”を目指しませんか？」(チラシ) 2019年3月時点発行

日下部貴史, 西村優紀美, 2016, 「富山大学におけるピアサポート活動の現状と課題」, 『全国高等教育障害学生支援協議会(AHEAD JAPAN 2016)第2回大会 論文集』 p103~p104

【Web サイト】

- ・富山大学学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室

<http://www3.u-toyama.ac.jp/support/communication/index.html>

(最終閲覧日 2020/04/13)

- ・独立行政法人日本学生支援機構 | 障害学生支援

https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/2019.html

(最終閲覧日 2020/07/06)

- ・令和元年度(2019年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書

https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/fieldfile/2020/04/02/report2019_0401.pdf

(最終閲覧日 2020/07/06)

- ・地域猫とは | NPO 法人 動物たちを守る会ケルビム

http://cherubims.or.jp/activity/area_cat/area_cat_1.html

(最終閲覧日 2021/08/25)

- ・地域猫ってなーに？野良猫とちがうの？(PetLIVES)

<https://petlives.jp/love-cat/13085>

(最終閲覧日 2021/08/25)

- ・知的障がい仲村さん、再び不合格 高校受験 家族「学力選抜での不合格は差別」(琉球新報)

<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-901756.html>

(最終閲覧日 2021/08/25)

・トップページ | 公益社団法人ガールスカウト日本連盟

<https://www.girlscout.or.jp/about/>

(最終閲覧日 2021/08/30)

【注釈】

¹：PC テイクに関しては、単独入力による方法(手書きと同様に個人で行う方法)と連携入力による方法(聞こえてくる文章を複数人が協力して文章を完成させていく方法で、単独よりは入力出来る情報は多くなる)があるが、富山大学では基本的に連携入力方式を採択している。

²：ガールスカウトとは、以下の3つをポイントとして活動に取り組む。

1. 自己開発(興味を持ったことに挑戦し、自分で考えて実行する力を身につける)
2. 人とのまじわり(様々な人との交流を通じてお互いを尊重し合うことを学ぶ)
3. 自然と共に(野外活動を通じていのちや自然の大切さを身近に感じる)

少女と女性のための環境では重い荷物があっても工夫して皆で運ぶ、物事を進めるときは話し合って民主的に決めるなど、さまざまな体験の場があって、そのことは少女たちの実行力、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力を培う。そしてガールスカウトは小さい少女だけでなく、大人になってもガールスカウトに当てはまる。自分のため、仲間のため、地域・世界のため、未来のためといった、一生を通して経験出来る生涯学習である。ガールスカウトで得られるものとして、「自分で判断して行動出来る」、「リーダーシップ能力」、「高い自己肯定感」、「世界的視野を広げる機会」を挙げている。

³：『地域猫』とは、猫と人間とが共存していくために、猫のホームレス化を防ぐことを目的とし『地域で適切飼育管理された猫』のことである。野良猫のように飼い主がいない猫を地域住民が適切な管理や飼育を行い、地域でホームレスな猫を減らす活動のこと。

適切な管理や飼育(活動内容)は主に3つある。

1. TNR (T=捕獲：Trap N=去勢不妊手術：Neuter R=元に戻す：Return)
2. お世話して管理する
3. 地域住民の理解と協力を得る

活動において、1のN(去勢不妊手術)がマストで、去勢済みの猫の耳にはV字カットするのが全国ルールとなっている。

O1は「去勢不妊する」ということは、これ以上猫が増えないため最終的には猫を消そうとするのと同じであると考え、障害も同じようにするべきではと発言したのである。

⁴：重度の知的障害がある仲村伊織さん(当時 16)が 2 度目の沖縄県立高校受験に挑んだものの不合格となった。受験した 1 次募集の全日制、2 次募集の定時制共に定員割にもかかわらず、県教育委員会は「一定の点数が足りず、入学しても高校の教育課程をこなすことは難しい」としているが、これに対して仲村さんの家族は県教育庁を訪れて、「テストで点数が取れないことが知的障がい者の特性であり、今の選抜制度では本人の努力が反映されない。2 次でも学力選抜で定員内不合格とされることは差別」と批判した。仲村さんは 2018 年度に重度知的障がい者として県内で初めて公立高校を受験したが不合格となった。受験の成立に必要な「合理的配慮」が十分でなかったとして、県に助言(斡旋)を求める申請をした結果、今春の入試では調整委員会の提言を受けて支援員の増員や代読・代筆が認められたものの、今回の不合格で仲村さんの両親は「合理的配慮の改善は見られたが、テストで得点する事自体難しい息子の障がい特性が考慮されていないことは変わらず、努力を評価してもらえない」という。

※上記が琉球新報による、沖縄での高校入試に関わる内容であるが、O1 はこのことについても踏まえて、先の発言をした。